

〈特別講演〉

## バルザック世界が見せてくれるもの

大竹 仁子

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの『星の王子さま』には、私たちが嘗て子どもの頃に体験した数多くの出会いの感動が綴られています。大人になった今は、差し迫った現実には流されてそれらを顧みることすら少なくなっていますが、この作品は、その詩的な感動を心に蘇らせることによっていっそう深く理解できるように思います。もちろん、フランス文化の深層を踏まえた、高度な文明批評や深い人生哲学が語られていますので、さまざまな視点から読み解くことが肝要ですが、バルザックの作品世界に入る前に、この作品との出会いから始めたいと思います。

### 1. 「心で見る」—『星の王子さま』との出会い

飛行士の「ぼく」は砂漠に不時着し、生命の危険にさらされています。そこに突然現われた「星の王子さま」は、何か自分の想いに深く囚われている、幻想的で謎めいた存在です。この王子さまを「ぼく」や読者が実感していくのに、作者はどのような仕掛けをしているのでしょうか。

王子さまと「ぼく」は、最初、それぞれ、自分の視点、論理、価値観でしか話しませんから、会話は容易には噛み合いませんが、やがてお互いにかけてえのない相手だと自覚するようになります。その共感はどうにして生じていったのでしょうか。

キツネとの出会いの挿話が重要な役割を果たしています。王子さまとキツネも、最初はやはり、それぞれ自分の想いを相手に伝えるだけです。そこで、キツネは「なじませる (apprivoiser)」という言葉を使って、二つの存在—必ずしも生き物同士とは限りません—がお互いに心を通じ合わせる、つまり友だちになるということの本質的な意味を王子さまに語り聞かせ、体験させます。王子さまの心の中に、やがて、「なじみ」という感情が芽生えます。最後に、キツネは「心で視なければ、ちゃんとは見えない。本質的なもの (l'essentiel) は目には見えないんだ<sup>1)</sup>」と、この物語のキーワードとも言える秘密を教えます。これは文学作品であり、表現手段は言葉が主ですが、非常に視覚が重視されています。数多くの絵が挿入され、絵本とも言えます。それでいて、視覚を否定するかのように「目には見えないもの」の大切さを説いているのです。これは何を言おうとしているのでしょうか。

王子さまと「ぼく」が会って8日後、「ぼく」にとって事態はいっそう深刻になっていますが、キツネと会って、「なじみ」という言葉の意味を認識した王子さまは、渇きで死に瀕している「ぼく」の状態を初めて感じ取ることができるようになり、「水は心にもいいものだ」と納

得して、二人は砂漠の中に井戸を探しに出かけます。そして極限状況にある「ぼく」の心もまた、「満天の星が美しいのは、目には見えない花が、どこかの星に咲いているからであり」、「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠し持っているからだ」という王子さまの言葉に反応し、突然啓きます。

なぜ砂漠の砂が不思議な光を放っているのか、にわかに合点がいて、ぼくははっと驚きました。子どもの頃、ぼくは古い家に住んでいました。言い伝えによると、その家には宝物が埋められているということでした。もちろん、だれもその宝物を見つけだすことはできませんでしたが、たぶん、探しもしなかったでしょう。けれども、その宝物は家全体を魔法にかけていたのです。ぼくの家はその奥深くに、秘密を隠し持っていたのです...<sup>2)</sup>

「家だって、星空だって、砂漠だって美しいのは、目には見えないもののおかげだね」という「ぼく」の言葉は、王子さまをたいそう喜ばせます。これは大人の「ぼく」が日常的には「探しもしなかった」つまり「見ようとしなかった」宝物に気づいて、ついに王子さまの持つ「心で視る」という能力を取り戻したこと、王子さまと「ぼく」とが同じ世界に存在することになったことを意味します。大人の心の大部分を占める認識の世界と子供の心の大部分を占める直観的なイメージの世界とが重なり合って、一つの共有の場が啓かれたのです。「ぼく」にとって「心で視るもの」とは、幼い頃の神秘的な宝物との出会いの感動だったのです。人間にとって、この世との最初の出会いは、このように言葉以前のイメージ、言葉の奥に閉じ込められた原初的で感覚的なイメージなのではないでしょうか。その感動はきっと生涯ずっと身体のどこかに残り続けるものなのでしょう。細胞次元での根源的な記憶とも言えるこの感動の蘇りこそ、キツネの言う「心で視る大切なもの」なのではないでしょうか。

この作品は、もちろん子どもが読んでも理解できるように描かれているのですが、多くの子どもは「わからない」、「面白くない」との感想を抱くようです。これは、冒頭のレオン・ウェルトへの献辞にもあるように、大人になっても子どもの心を持ち続けている大人のために大人が書いた童話なのです。谷川俊太郎氏の『風穴をあける』というエッセー集の中に面白い記述があります。「童謡はおとなが作るもの」であり、「子どもの読む本も、遊ぶ玩具も、みな作るはおとなであって子どもじゃない」、子どもが好むのは、アニメの主題歌でありコマーシャルソングではないか、大人は童謡というものに特別な意味をもたせ、「一種の強い感情移入」をする、童謡とは「おとなが歌って自分の子ども時代を懐かしむことのできる歌<sup>3)</sup>」のことであるというものです。私たち大人は好んで童謡や青春歌を口ずさみます。何度も繰り返し口ずさんで飽くことはありません。『星の王子さま』も、物語の筋や結末は何度も読んですっかり分かっているのですが、繰り返し読んでもその感動が減少したり、損なわれたりすることはありません。読む度に改めていっそう魅了されます。その秘密も、この幼い頃の感覚的な記憶の蘇りと深く関係しているように思われます。

ブルーストがマドレーヌを口にして、甘美な「特権的瞬間」を体験したように、読者は『星の

『王子さま』を読む度に、幼い頃の出会いの感動、失われてしまっているだけにいっそう哀愁を帯びている感動といったものを蘇らせているのではないのでしょうか。王子さまのイメージや言葉と、読者の子ども時代の感動とが共鳴し合って創り出される瞬間、極めて原初的で感覚的な詩的出会いの場こそ、「目には見えないが、心には見えるもの」なのではないのでしょうか。これはまた、読者一人ひとりが個々に体験する、その人だけの出会いでもあります。作者は、王子さまの種々の冒険を描き、「ぼく」との価値観や論理の微妙なずれ、二人の出ず不協和音を繰り返し語って、二つの世界の違いを読者に気づかせながら、用意周到に、意図的あるいは直観的に、この詩的な出会いを仕組みます。しかも作者は仕組みだけで、「心で見る」のは個々の読者自身に委ねます。「人は皆、違った星空を目にしているんだ。[……] 君は、誰も手にしたことのないような星を手に入れるんだよ。[……] 夜、君が空を見上げると、星空の星の一つにぼくが住んでいて、星空の星の一つでぼくが笑うことになるのだから、君にとっては、満天の星という星がまるで笑っているように見えるだろう。君だけは、笑うことのできる星空を自分のものにするようになるんだ<sup>4)</sup>」という王子さまの言葉からもそのことは充分読み取ることができます。作者の想像力が創り出す虚構の世界の現実化を完成させるのは、ひとえに、読者という個人の心なのです。最後のページにボツンと描かれた一つの無言の星は何と多くを読者に語りかけていることでしょうか。心憎いばかりの作者の仕掛けです。

## 2. 人間の内的存在—『ルイ・ランベール』

19世紀初頭のフランス社会を筆で再現することを目指したバルザックもまた、意識的に、「見えないもの」の表現を絶えず模索し続けた作家の一人です。ユゴー<sup>5)</sup>やボードレール<sup>6)</sup>は早くから幻視家 (visionnaire) としてのバルザックの資質を見抜いていましたが、一般的には、ロマンティズムの時代に既に現実を冷徹な目で観察したリアリストと評され、クルティウスの『バルザック論』が出版されるまでは、概ねその評価が大勢を占めていました。しかし、最近ではこの観察力と幻視力との相乗効果を駆使して際限なく増大していく空間を創り出した類い稀な小説家という評価が定着しています。従って、バルザックを論じる際にはこのリアリストと幻想家という二面を同時に見ていく必要がありますが、今回は特に「見えないもの」を追うバルザックの視線に沿って幾つかの作品を見ていきたいと思えます。

生まれるとすぐ里子に出され、4歳近くまで母親の元に戻れなかったバルザックは、同じように里子に出された妹ロールを例外として、周囲の人間との意思疎通が苦手で、孤独な心を持った少年だったようです。星と語って寂しさを慰め、ヴァンドーム学院の寄宿生となった8歳以降は読書に耽溺したことが、『谷間の百合』、『ルイ・ランベール』等の作品あるいはロールの伝記で語られます。寂しさを紛らわす種々雑多な書物の濫読はバルザックの幼い肉体を蝕み、後に彼自身が「観念の鬱血 (la congestion d'idées)<sup>7)</sup>」と呼ぶ昏睡状態に陥り、帰宅を余儀なくされてしまいます。1832年に出版された『ルイ・ランベール』で彼の幼少期の姿を追ってみます。

この作品では、大人になった「私」が友人ルイとの幼い日々を語るという形で物語が進行しま

す。「読書が何物をもっても充たすことのできない一種の飢えとなり、あらゆるジャンルの本を貪って、宗教、歴史、哲学、物理学の著作を手当たり次第無差別に読み漁り、ほかに読むものがないときは、辞書を読んで、信じられないほどの無上の喜びを味わっていた<sup>8)</sup>」早熟な少年ルイ、その読書の仕方は、「眼は一度に7、8行を見て取り、精神は視線の速さに匹敵するスピードで文の意味を汲み取り、往々にして、文中の一語だけで、文章の精髓を把握するのに充分だった<sup>9)</sup>」こと、また、読書を始めると、「いわば肉体生活の意識を失って、彼の内的器官の強力な活動によってしか存在しなくなる<sup>10)</sup>」ほどの集中力を示したことが「私」によって語られます。これはバルザック自身の姿です。ロールは「ここでの『私』とルイ・ランベールとは同一人物である。二人の人物になったバルザックである<sup>11)</sup>」と書いています。「私」が後に作家になったことはこの作品の中にも書かれています。小説の中で「詩人とピタゴラス」と一対にして呼称されているように、二人は「創作する」バルザックであり「思索する」バルザックだと言えます。

ルイは膨大な読書や深い思索によって、類推力や透視力を高め、想像力を増大させていき、可視的な事象だけでなく、不可視で神秘的な体験、神、とりわけ人間の内的能力である思惟 (la pensée) の発生や実体についてもその思索を抜けていきます。そして、「考えることは見ることである<sup>12)</sup>」と考え、通常は不可視の、人間の内的な能力である意志 (la volonté) や思惟も、「言わば目に見えるもの、手で触れることのできるもの<sup>13)</sup>」となっていきます。あらゆる事象を唯心論で説くルイと唯物論で迫る「私」はこうして他の生徒たちから疎外されながらも、辛い学園生活を「感情と思想」で彩っていきます。

ある遠足の日に、今日の心理学が既視体験 (déjà-vu) と呼ぶ現象を体験したルイは、精神と肉体とは分離しうるのはないかという仮説を立て、人間の内的能力について『意志論』を書く決心をします。人間を感覚的・肉体的存在と知的・霊的存在との二重性で捉えるだけでなく、「人間には完成していく内的な資質 (des qualités intimes et perfectibles) が授けられていて、それを鍛錬し発達させると、まだ観察されていない活動や浸透や幻視の現象が私たちの中に生み出されるのではあるまいか<sup>14)</sup>」と、驚異をただ「詩的創作」だけで片付けてしまうのではなく、物理的にも解明しようとしています。そして、「人間の生命はたぶん不朽不滅なものだろうが、われわれの外部感覚では捉えられない。しかし内的存在が高度の法悦境とか完全に物が見える域に達したら、そういう内的存在にとって生命は知覚できるものになるかもしれない<sup>15)</sup>」との予感を抱いて、「ぼくたちは有名になるよ。[……] 意志の化学者になるんだ<sup>16)</sup>」と子供らしく高揚します。また、意志と思惟は同一の根源から生まれたもので、それぞれ独立した実体であり、意志から意欲が、思惟から観念が生み出され、人間の内的能力である意志や意欲は外的行為を構成し、思惟や観念は内的機構であり行為であると考えます。そして「考えるためには望まなくてはならない<sup>17)</sup>」のだからと、意志を思惟に先行させ、外的行為の因としての意志の優位性を説きます。ここには、目に見える外的現象だけでなく、目には見えないが心で感じることのできる内的現象をも人間の現実であると実感し、外的現象との因果関係で結び付けようとするバルザックがいます。しかし、その原稿は完成する前に教師に取り上げられてしまい、その後、身体を壊して学院を去った「私」には『意志論』の行方はわかりません。ルイに再会したのは、ルイが発狂した後でした。偶然ル

イの伯父と出会い、その後のルイのパリでの寂しい学究生活、ポーリーヌとの恋愛、結婚の前夜の出来事を聞いて会いに出かけますが、思索の深まりで純化されたルイの精神と肉体は、結婚の前夜、官能への期待の高まりに抗しきれず、ついに「カタレプシー」と呼ばれる状態に陥って、現実との接点を失ってしまったのです。ポーリーヌが書き取った幾つかの断片が「私」に手渡されます。深い思索によって研ぎ澄まされた、感じやすいルイの心はいったい何を視ていたのでしょうか。

生涯、母性への充たされぬ飢餓感を抱き続けたバルザックの心の寂寥はしばしば星への語りかけや神への祈りに向かったようです。「星の王子さま」同様、幼い子供の心だけが感じ取ることのできる素朴な神秘体験を重ね、読書で培われた幼いバルザックの思考力や想像力は、自己の内部に宇宙との繋がりやその生成原理の瞬間を直観していたのかもしれませんが。想像力の際限なさとその威力への期待、その爆発力への恐怖心については、ポーリーヌへの手紙の中でルイが次のように綴っています。

ぼくの宿命的な想像力がぼく自身に引き起こす恐怖のことを世間では誰も知りません。それはしばしばぼくを空中高く持ち上げると、いきなりとてつもない高さからぼくを地上に突き落とします。心の奥で迸る力、稀で人目にはつかないけれど、特別に頭が明晰に働いていることを示すし、そういうものが時たまぼくに、お前は大したことができる男だと告げます。するとぼくはこの世界をぼくの思惟のなかに包み込み、世界を粉のように捏ね回し、細工を加え、その奥深く入り込み、世界が何たるかを理解します、いや、理解したような気になります。ところが、突然、目が覚めると、ぼくは一人ぼっちなのです。深い闇の中で、ひどく情けない様子をしています。今しがたチラリと垣間見た光を忘れ、どこからも救いの手は来ず、とりわけ寄りすがる心など一つも見当たらないのです<sup>18)</sup>。

この手紙はポーリーヌへは出されず、ルイの死後、「私」がルイの部屋で見つけたものです。愛する人を見出して、「気違いじみた熱狂」のうちに書かれた手紙ですから不安な心が増幅されていますが、詩人バルザックの想像力の凄さを垣間見させてくれます。「あまりに深い知識は、無知と同様、一つの否定に到達するのだ<sup>19)</sup>」といった不安が30代のバルザックには付きまとっていたようです。しかし、神秘や奇跡に魅了され、想像力の巨大さに圧倒されながらも、フレンホーフエル、ガンバラ、バルタザールといった「出来損ないの天才たち (les génies manqués)」とは違って、強靱な意志力で努力を重ね、想像力の横溢と闘い、常に「筆を手にして思索し<sup>20)</sup>」、宇宙を脳の中に取り込み、ルイの言葉を借りれば「世界を粉のように捏ね回し、細工を加えて」表現していくのです。ルイの心身は28歳で破壊されてしましますが、「私」は生き延びます。

意志を思惟に先立つものとし、「多くの人々は思惟の状態に到達することなく、意志の状態で生きている<sup>21)</sup>」と考えていたルイは、地上の全ては「エーテル性実体」からできていて、この実体から養分をとる意志は、思惟となって実体の全ての変化の中に入り込み、実体を見出すのだと書き残し、さらに、観念の世界をその知的完成度に応じて、「本能圏」、「抽象圏」、「特殊圏」の3つの圏に分けます。本能の力は人間の最も弱い部分で、多くの人間はこの力のみで生きている、

人間の知能の第二段階は抽象の力で、「法律、芸術、利害関係、社会思想」を創り出す、特殊性とは、この世のあらゆる事象を、瞬時に、その根源と結果において見ることのできる力とし、「特殊家は、必然的に『人間』の最も完成した姿であり、目に見える世界を上位の諸世界につながり合わせる輪である。特殊家はおのれの『内部』によって行動し、見、感じる。抽象家は考える。本能人は行動する<sup>22)</sup>」と付け加えます。そして、「内的視力の完成は特殊性の才を生む。特殊性は直観をもたらす。直観は、特殊状態をその属性とする『内的人間』の諸能力の一つである<sup>23)</sup>」と言うのです。これは、論理的に極められたものでも、科学的に実証されたものでもありませんが、人間の内的能力の一つである知性を「完成していくもの」と動きの中で捉え、その完成度によって人間を分類しているところにバルザック独自の考え方が見られます。

この作品は33歳での回想記ですから、12、3歳当時のバルザックそのままではありません。青年期の体験や知識が加わって出来上がった作品ですが、その正否は別として、神秘に対する子供らしい驚異の念から展開されたこれらの考察は、巨大な想像力や創作上の苦闘に脅かされるバルザックを励まして、天才になれるという予感を確信させ続けたに違いありません。生命現象はもとよりあらゆる事象を表裏の二重性で捉え、目に見える表面的な事象を「果」として、その裏に欲望や観念の支配する広大な不可視の「因」の内的世界を展開させ、それらに緊密に絡み合った因果関係を樹立させるというのは、小説家バルザックがその虚構世界を創り上げていく根本的な原理となっていきます。晩年の作品『従妹ベット』冒頭のテアノ公への献辞の中でも、『ルイ・ランベール』に出てきた「人間の二重性 (Homo duplex)」の語句が使用されます。バルザックは「美德にすら表裏がある<sup>24)</sup>」と述べ、周囲の人々から善意の人と慕われるベットの心の奥底の暗い復讐心を炙り出します。人間の内的能力の完成に関しては、とりわけ1835年の幻想的な作品『セラフィタ』の中で素晴らしい展開を見せます。バルザックの想像力は一度も訪れたことのないノルウェーのフィヨルドに面した寒村での人間の天使への変容という虚構に見事な現実性を与えています。

では通常「特殊家」にしか見えない筈の生命現象を具象化した作品だとも言える『あら皮』を概観します。

### 3. 見えないものを追って

#### 1) 『あら皮』

人生に絶望したラファエル青年は、居合わせた人々の心を言いようのない恐怖に陥れる異様な雰囲気醸し出しながら賭博場に現われ、最後の金貨をすってしまいます。自殺の時間待ちでセーヌの河岸を歩き、出会った2人の物乞いに有り金全てをはたき、骨董屋に入ります。過去の栄華を偲ばせる古美術に囲まれた彼はしばし現実とも非現実とも言えない半睡状態に陥ります。闇の中から不意に一人の不思議な老人が現われて、ラファエルに声を掛けます。バルザックが透視力を発揮する対象は、フレンホーフエル、ファチーノ・カーネ、ゴリオ等、なぜか、多くはこのような悪魔的な姿をした老人です。この老人はラファエルに1枚の皮を見せます。皮にはサンス

クリット語が書かれています。ラファエルはそれを楽し々と読みこなします。この皮を所有する者はすべての欲望をかなえられるが、欲望の成就とともに皮は縮み、所有者の命も削られていくというのです。老人はそこで、本能的な行為である「vouloir」と「pouvoir」とは生命を枯らすものであり、「savoir」を中心とした知的な生き方を勧めます。「破れやすい心の中や興奮しやすい感覚の中ではなく、記憶の中で生きること」、「見ることは知ることであり」、知ることを直観的に楽しむこと、身体を疲弊させる欲望と観念に代えて、夢を見るのが肝要と、老人は興奮して語ります。

心痛、愛、野心、失意、悲哀を感じる代わりにそれらを表現し、解釈する。自分の命を貪り食わせる代わりにそれらを芝居にし、発展させて、心の目で読む小説とでもいったように楽しむんじゃ。[……] 自我のうちに宇宙を顕現させる崇高な能力、時の絆にしばられず、空間の桎梏にとらわれずに行動する喜びの深さ、全てを抱擁し、全てを見、この世の縁に身をかがめて、他の天体を探り、神の声に耳を傾ける楽しさ、これらの喜びより、裏切られてばかりいる人間の痛ましい意志の方がいいだなんて！<sup>29</sup>

老人が口走ったこれらの言葉はもはや骨董屋の言葉ではありません。作家バルザックが独自のエネルギー論を展開しているのです。ラファエルは知的享楽こそ長生きの秘訣であると言う老人の忠告を無視して、皮を手に入れ、大饗宴と巨万の富を願います。願いはすぐに成就し、友人たちに銀行家タイユフェルが催す宴会の場に連れて行かれ、翌朝、伯父の遺産が転がり込んだことを知らされます。あら皮は縮んでいます。百万長者となったラファエルは死を恐れ、引きこもった生活を始めます。唯一の救いはポーリーヌとの出会いです。かつて貧しい下宿生活をしていたときに会った彼女もまた巨額の富の相続人となっています。2人は愛し合い結婚を約束します。ラファエルは、「あら皮」の呪縛から逃れようとあらゆる手段に訴え、科学者たちに相談しますが、「あら皮」はラファエルの目前で縮んで行くばかりです。最後の力を振り絞ってポーリーヌの胸に飛びついたラファエルは力尽きて息絶えます。

この作品は、『ルイ・ランベール』より先、1831年に発表されました。ラファエルが宴会の場でエミールに語る自分の過去は、自信と失敗に充ちたバルザック自身の青年期の姿と重なります。ラファエルも『意志論』を書いています。当初は東洋風コントを書くつもりだったようですが、結局は19世紀初頭のパリという都会を舞台に物語は展開します。絶望したラファエルが「あら皮」に願った大饗宴への招待も、突然の遺産相続も、彼の死も、ポーリーヌとの恋愛も、骨董屋の老いらくの恋も、この作品で描かれる全ての出来事は、大革命後の動乱期、19世紀初頭のパリでなら、どれも歴史的現実として扱えるものです。ただ一つ、ラファエルの欲望成就に応じて縮む「あら皮」の存在だけが幻想性を帯びています。実在と虚構とが混在して、虚構性が隠れていくというのはバルザック世界の特徴の一つですが、現実と非現実の間の深淵をたやすく飛び越えることのできるバルザックにとっては「あら皮」が象徴する生命現象もまた目に見える実在だったのではないのでしょうか。

1829年に発表した『結婚の生理学』の中で、情熱、意志、欲望、思惟、観念等を人間の内部に

発生する生命エネルギーと呼び、人生とは情念の消耗過程であると、そのエネルギー論を展開しています。各人が所有している一定量のエネルギーは「ただ一つの力で、時に欲望や情熱や知的作業や肉体労働と化して、人が呼ぶところに駆けつける<sup>26)</sup>」と述べています。ルイが「エーテル性実体」と記したものがここでは一定量のエネルギーと呼ばれているのですが、人間の内部で確かにその存在を実感できるエネルギーの燃焼、ルイにも視えていたという生命そのものに定形を与えて目に見える実在物としたのが「あら皮」なのでしょう。つまり、「あら皮」は生命エネルギーたる欲望の具象化されたものであり、同様に欲望の具象化である「金銭」とも同じものだと言えるのではないのでしょうか。ここではこれ以上の言及は避けませんが、「金銭」はバルザックの因の世界ではエネルギー論の重要な一端を担っています。『結婚の生理学』で定義され、『あら皮』で小説的な展開を見せたこのエネルギー論は、以後、バルザック世界の随所に仕掛けられて、バルザック世界の謎を解く鍵となります。エネルギーとして人間の内部に存在する、形の定まっていない欲望は、思考と感情を内に秘めながら、情熱や金銭と化して、人物や社会を裏で動かしていくのです。情熱は人物たちに強力な生命力を与えますが、抑制し損なうと非常に破壊力をも行使します。自然や社会を詳細に観察したバルザックはこうして、「芸術の使命は自然を模写することではなく、表現することだ<sup>27)</sup>」との言葉通り、独自の原理を掲げて、その世界を再構築していったのです。古い家を魔法にかける宝物のように、この生命エネルギー、情熱はバルザック世界全体をその深部に輝かせています。それにしても情熱や欲望といった生命エネルギーの燃焼過程が現実に見えて、死へのカウントダウンが現実に行っているのを目前にするとは何と恐ろしいことでしょう。事業で、旅行で、恋愛で、そして何よりも執筆でエネルギーを使い果たし、自分自身の生命が縮んでいくのが、バルザックの目には実際に見えていたのでしょうか。51歳でエネルギーを燃焼し尽くす自己の姿を予言しているかのような作品です。

それではバルザックが芸術家には備わっている筈だという「透視力」を扱った作品『ファチーノ・カーネ』を見てみます。

## 2) 『ファチーノ・カーネ』

勉学に励み、禁欲的な生活を送る主人公の唯一の気晴らしは、場末の町をうろつき、その貧しい住民たちを観察し、透視力によって彼らの心の奥深く入り込み、彼らになり代わってその秘められたドラマを自分のものとして生きることであったと、この作品もまた、バルザック自身の修業時代の姿を描写することで始まります。

招かれて出席した結婚式で、盲目のクラリネット奏者と出会い、間近で彼を見た途端、「どうしたわけか、すべてが止まり、婚礼祝いの音楽も姿を消した。私の好奇心はこの上ないほどかき立てられた。というのも、私の心がクラリネット吹き of 身体の中にずっと入り込んで行ったからだ<sup>28)</sup>」と主人公は語ります。演奏中に始まった主人公とクラリネット奏者の会話は、会場を出てバステューエのお堀端で続けられます。ヴェネツィア生まれのファチーノ・カーネは人妻ビアンカに恋して、その夫を殺してしまい、逃亡しますが、一文無しになって舞い戻り、捕らえられ、総督宮の地下牢に閉じ込められます。ファチーノ・カーネには「金」のありかを透視する特殊な



能力が備わっていて、脱獄を図って地下道を掘り進んで行くと、共和国の財宝の隠された部屋に出ています。牢番を丸め込み、財宝の一部を手にして首尾よくビアンカともども脱出して、パリで贅沢三昧な暮らしをしますが、やがてビアンカは死亡し、突然失明してしまい、すべての金を女に持ち逃げされ、今は施療院にいるのだと語ります。失明しても「金」の所在は見えると言い、残してきた財宝を取りに行こうと主人公を誘います。返事を躊躇している主人公に老人はもう一度クラリネットを聴かせます。そのもの哀しい音色に、主人公はヴェネツィア行きを承諾しますが、老人は2ヶ月患って死んでしまいます。

この短編では全ての出来事が現実なのか非現実なのか判然としない状態で描かれています。結婚式場から出て、お堀端で聞かされた話も、実は主人公の透視力が勝手に創り出した一幅の夢物語であるとも読めます。貧しい人たちの集まる祝賀の熱狂の中で、主人公はその透視力によってファチーノ・カーネの盲いた眼からその体内に入り込み、彼になり代わって、彼の過去の時間を実感するのです。音楽と喧騒の入り混じる現実の中において、非現実の中を流れる過去の時間を生きるのです。ロールの伝記によるとバルザック自身もこのように現実と非現実を同時に生きている、その会話の中にまるで実在人物であるかのように登場人物たちが入り込んでいたようです<sup>29)</sup>。『谷間の百合』では、若いフェリックスの突然の接吻で官能に目覚めたモルソフ夫人も、充たされぬ欲望がフェリックスという対象を得て一つに固まり情熱化したとき、内的視力を獲得します。トゥール近郊のクロシュグールドにいながらパリのフェリックスの姿や未来が見えるのです<sup>30)</sup>。

次に1839年に発表し、バルザック自身が「予想以上の出来栄<sup>31)</sup>」とテオフィル・ゴージェエに書き送った『村の司祭』での情熱の描写を見てみます。

### 3) 『村の司祭』

この作品では二つの話が並行して物語が展開していきます。ヴェロニックを中心とする物語とタシュロン事件です。リモージュの屑鉄商人の一人娘ヴェロニックは勤勉で信仰の篤い両親の愛情に包まれて「小さな聖母さま」と称されるほど美しく育ちますが、11歳のとき天然痘に罹り、皮膚は黒ずんで厚くなり、顔中にあばたができて、その美貌は目と歯以外はすっかり失われてしまいます。18歳で『ポールとヴィルジニー』と出会い、心身に豊かな感情が芽生えます。20歳で47歳の醜い銀行家グララン氏と結婚します。周囲の期待に応じて理性は円満な家庭を築こうと努力しますが、肉体と感情はこの結婚生活を拒み、嫌悪感が増すばかりで、3年後には家庭内別居状態になります。宗教や慈善事業で心を癒し、結婚で解禁になった読書に慰めを見出します。精神生活は豊かになりますが、現実化できない欲望にも悩みます。結婚6年目に待望の懐妊を果たし、男の子を無事出産します。長い産褥期からやっと回復した夫人は、持参金を土地にかえるという結婚契約の履行を夫に願い出て、売りに出ているモンテニャックの土地を手に入れます。1830年、銀行関係を襲った恐慌で大きな損失を出したグララン氏は病に倒れ、夫人の献身的な看病の甲斐も無く、翌年この世を去ります。残務整理後に残った財産を持って夫人はモンテニャックに移り住み、ボネ司祭の導きで灌漑事業を起こし、不毛の地であったモンテニャックを肥沃な土地に変え、「聖女」と崇められながら、42歳でその生涯を閉じます。死を前にした夫人のたっ

での願いで公開懺悔が行われますが、友人たちのすすり泣きでその内容は一つ村人たちには届きませんでした。一方、タシュロン事件というのは、丁度夫人の懐妊が伝わった頃に起こりますが、吝嗇なパングレ老人とその女中の殺人事件です。モンテニャック出身のタシュロンが逮捕され、検事代理のグランヴィル子爵がこの事件を担当します。タシュロンは事件の動機も共犯者についても黙秘し続け、事件の真相は闇に埋もれたまま、状況証拠だけで処刑されます。盗まれた金貨は妹のドニーズの手で川の中から掘り出され、パングレ老人の相続人に戻されます。一家はモンテニャックを離れて、アメリカに移住しますが、やがてドニーズは戻ってきて、夫人の願いで、息子ジャックの後見人である技師ジェラルドと結婚し、ジャックとともにモンテニャックで住むことになります。

この二つの話は一見無関係に展開されるのですが、やがて一つの物語として繋がっていきます。繋ぐのはグララン夫人の存在です。事件の裏に夫人とタシュロンとの不倫の恋が隠されているというのです。夫人を苦境から救い出そうとひたすら願った、純朴なタシュロンが、逃亡の費用を得ようと老人を襲い、殺人に至ってしまったのです。自分が育てた青年を狂わせてしまい殺人者にしたと夫人は自責の念に駆られますが、このことは公開懺悔まで一切明言されません。ただ夫人や母親の謎めいた言動は読者の想像力を刺激し、事件の闇を推理させてくれます。バルザックはとりわけ入念に夫人を創造しています。「聖女さま」と呼ばれるほどの崇高な美貌と天然痘による破壊、病魔による破壊作業を免れた優美な曲線美の残る肉体、形はいいが遅い足、時折、そして公開懺悔の折にも鋭い光を放ち続ける目、篤い信仰心と素朴な日々を送る娘時代に『ポールとヴィルジニー』によって一挙に豊かになった情感、心身の変化をじっと見つめて孤独に過ごす強靭さ、期待した結婚に失望し読書によって育まれた逸樂的な恋への憧れ等、ヴェロニックの心身のカオスが随所で語られます。夫人を庇って黙秘したまま処刑されたタシュロンの深い想いを考えると、夫人は何も言い出せないのかも知れませんが、正確な意図を見抜けなかったとはいえ強盗の見張りをし、相手が処刑された後も世間を欺いて共犯者であり続けるグララン夫人、検事の目前でぬけぬけと事件を解釈したり、検事や陪審員となった夫に減刑を示唆したり、自分とは無関係な事件として対応する夫人の強靭さは驚くばかりです。

バルザックは『人間喜劇』の「総序」の中で「情熱が人間性の全てである<sup>32)</sup>」と述べていますが、内部で夫人を動かしているのもこの情熱です。天然痘に罹って以来閉ざされ続けたヴェロニックの内部に生じ、読書による想像力で掻き立てられ増幅されていく欲望、対象を持たなかったその欲望が若く誠実なタシュロンの魂と出会って情熱と化したのです。欲望が対象を一つにして固まったとき情熱に化すというのはバルザックの持論<sup>33)</sup>です。夫人の内部に昂じていく情熱の激しさは、赴任以来グララン夫人を敬愛し続けるグランヴィル検事を見据えるときの夫人の鋭い眼差しや公開懺悔の最中にも荒々しい誇りで煌く激しい眼差し等、病魔の破壊作業を免れた夫人の美しい目から発せられる眼差しを通して表現されます。最後までフェリックスを求めてやまない断末魔のモルソフ夫人の眼差し、決闘相手を射すくめるラファエルの眼差しとも同じものです。一方、激しさだけではなく、情熱の持つ最も美しい姿、「崇高さ」も、ヴェロニックのカオス的な存在の中で表現されています。「何かある激しい感情がヴェロニックのうちに沸き起こると

[……]、内面の光が、その輝きで天然痘の跡を消し去ってしまうようだった。幼年時代の純潔で晴れやかな顔が、あの初めの頃の美しさで、再び蘇ってきた<sup>34)</sup>という場面です。聖体拝受を受けるとき、懐妊が伝わる前の短い期間、一般には禁じられていた公開懺悔を許された瞬間、懺悔を終えた瞬間等に、魂そのものといった美しさが蘇るのです。バルザックは、官能の昂まりや肉体的な悦楽の極まりの中に、神の永遠や愛の姿が啓示されると信じていたようで、ヴェロニックの魂の輝きの中に、その秘められた情熱の中に、その肉体と霊性の統一の中に、神の姿を視ているバルザックの心が感じられます。これら情熱のさまざまな姿は、「父性のキリスト」と譬えられるゴリオの内部に存在する娘への激しい執着心、子どもを持ちたいと冷静に企む虚弱体質のラ・ボードレの忍耐力、全ての財産と家族の愛情を犠牲にするバルタザールの科学への探究心等、バルザック世界の随所にその煌きが視られます。欲望を抑制して成功する人物はいますが、人間の内面で燃えさかる情熱を断ち切る闘いに勝利するのは天使に変容するセラフィタだけです。しかし情熱との闘いに勝利するというはこの世から姿を消すことを意味するのです。

一方、この作品は情熱が展開する内的世界を見せてくれるだけではなく、もう一つ興味深い特徴が見られます。全てを知って行動しているらしい母親やドニーズ、何もかも見抜いているらしい司祭たち、でも彼らはいったい何を視ているのでしょうか、なぜ金持ちのグララン夫人が盗みの共犯者なのでしょう、グララン氏は息子が自分の子ではないことを知っている筈です、しかし彼らは何も言いません。全てが闇の中にしまい込まれます。ここでは全てが推理小説のように進行していきますが、作品の中では誰も推理をしません。推理の糸を紡いでいくのは読者自身です。バルザックは至る所に暗示的な描写を入れてはいますが、客観的に事実を述べていくだけで、多くは語らず、読者に想像の楽しみや推理の自由を委ねています。全てを描写せずに読者に闇を埋めさせ、物語を完成させているのです。全てを描けば、フレンホーフエルが若いプーサンを前にして述べたように、人物の「キャンヴァス地への糊付け<sup>35)</sup>」が起こります。多くを読者に委ね、語らずして感じさせる、つまり人物の自在性を感じさせるこの手法、語らずしてなお作品の意図が損なわれないという見事な手法の最たるものが「人物再登場」であると思います。

#### 4. 結びにかえて—『人間喜劇』を完成するのは読者自身

「人物再登場」の手法とは、幾つかの作品に同じ人物を再登場させ、それぞれの作品は、独立性を保ちながらも、人物によって多くの作品が関連づけられるという方法です。1833年頃からバルザックは作品を系統化するという意図を持ったようで、1834年のハンスカ夫人への手紙<sup>36)</sup>の中で、全作品を、社会的結果を表現する「風俗研究」、人生や感情の原因を追究する「哲学研究」、原理を求める「分析的研究」の3つの作品群に分類すると伝えています。この考えは1842年の『人間喜劇』の「総序」でさらに明確に示されます。この系統化された約90篇の作品を一つにまとめるのに大きな貢献を果たすのが、全作品に行き渡っている独自の生命エネルギー論、あらゆる事象を表裏の因果関係で捉え、その内部に因の世界を展開させることであり、もう一つが「人物再登場」の手法なのです。2000名を越す登場人物たちを、時間的、空間的、哲学的に重層化し

た空間で自在に動かす方法としてこれほど適した方法はないでしょう。バルザックにとっても最高のアイデアだったようで、満面に喜びを輝かせて妹の家に駆け込み、「僕に敬礼しろ、僕は天才になるんだよ！」と叫んだようです。バルザック自身も「少したじろいだ様子だった<sup>37)</sup>」とロールは書いています。

単純に、一人の人物が時間の経過に沿って複数の作品に登場し続けるというのではなく、全く違った状況の作品にも登場し、その人物の別の側面が描写されるのです。ある作品で既にその性格や履歴を知っている人物に別の状況で再会するのですから、読む作品が増えれば増えるほど、多くの人物たちとの「なじみ」が深まり、「星の王子さま」と同じく相手への感情移入が起こり、まるで友人に出会うような親しみをバルザック世界に対して持つことになります。作品を読むということは、バルザック世界を自由に歩き回っているその人物たちと出会って話をするを意味します。特にビアンシオンは医者として人物たちの最後に立ち会う場合が多く、25回のラストエニヤックを抜いて、29回も再登場します<sup>38)</sup>。その描き方も見事です。多くの場合、バルザックは、「最後にビアンシオンが呼ばれた」と書くだけです。グララン夫人を診察し、「夜のしじまに馬車の音を響かせて去る」名医ビアンシオンの姿に、『ゴリオ爺さん』の貧しく勉学に励むビアンシオン、『グランド・ブルテッシュ綺譚』でメレ夫人の秘密を探るビアンシオン、『田舎ミュージ』で田舎生活に退屈するディナとパリの放蕩児ルストーとの仲を取り持つ名役者ビアンシオン等の若々しい姿を自由に重ねることができます。説明抜きでの「かの名医ビアンシオン」という短い表現は、まるで歴史上の実在人物であるかのような現実性をビアンシオンに与えると同時に、ビアンシオンの他の姿を想起させ、読者に、自らの中で自由にビアンシオン像を創り上げていくことを可能にします。

読者の原初的な神秘体験との共鳴で、「星の王子さま」の新たなイメージが無限に創り出されていくように、バルザック世界の人物たちも、再読する度に、読者の知識や状況に応じて、自由に、新たに、豊かに創り出されていきます。バルザックという一人の人間の知性を遙かに超すかに見える広大で重層的な世界が啓いて行くのがわかります。それは、バルザック世界の基本原理と構造そのものが私たち読者に、出会いへの期待と創造する喜びという目に見えない楽しみを与え続けてくれるからではないでしょうか。

## 註

- 1) SAINT-EXUPERY, Antoine de, *Le Petit Prince*, Gallimard, 1983, p. 72.
- 2) *Ibid.*, p. 78.
- 3) 谷川俊太郎『風穴をあける』収録の「童謡と私」、草思社、2002、p. 38.
- 4) SAINT-EXUPERY, Antoine de, *Le Petit Prince*, Gallimard, 1983, p. 87.
- 5) HUGO, Victor, «Le discours de Victor Hugo aux funérailles de Balzac» dans *Choses vues*, Hachette, 1950, pp. 89-92.

Tous ses livres se forment qu'un livre, livre vivant, lumineux, profond, où l'on voit aller et venir, et marcher et se mouvoir, avec je ne sais quoi d'effaré et de terrible mêlé au réel, toute notre civilisation contemporaine,

livre merveilleux que le poète a intitulé *Comédie* et qu'il aurait pu intituler *Histoire* ; qui prend toutes les formes et tous les styles, [...] livre qui est l'observation et qui est l'imagination ; qui prodigue le vrai, l'intime, le bourgeois, le trivial, le matériel et qui par moments, à travers toutes les réalités brusquement et largement déchirées, laisse tout à coup le plus sombre et le plus tragique idéal.

- 6) BAUDELAIRE, Charles, *Critique littéraire*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976, p.120. J'ai mainte fois été étonné que la grande gloire de Balzac fût de passer pour un observateur ; il m'avait toujours semblé que son principal mérite était d'être visionnaire, et visionnaire passionné. Tous ses personnages sont doués de l'ardeur vitale dont il était animé lui-même. Toutes ses fictions sont aussi profondément colorées que les rêves. (...) Toutes les âmes sont des armes chargées de volonté jusqu'à la gueule.
- 7) SURVILLE, Laure, *Balzac sa vie et ses œuvres*, Librairie Nouvelle, 1858, p. 21.
- 8) BALZAC, Honoré de, *Louis Lambert*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.XI, 1980, p. 590.
- 9) *Ibid.*, p. 591.
- 10) *Ibid.*, p. 194.
- 11) SURVILLE, Laure, *Balzac sa vie et ses œuvres*, Librairie Nouvelle, 1858, p. 20.
- 12) BALZAC, Honoré de, *Louis Lambert*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.XI, 1980, p. 615.
- 13) *Ibid.*, p. 631.
- 14) *Ibid.*, p. 622.
- 15) *Ibid.*, p. 630.
- 16) *Ibid.*, p. 623, 原文は « Je serai célèbre ! — Mais toi aussi, ajouta-t-il vivement. Nous serons tous deux les chimistes de la volonté. ».
- 17) *Ibid.*, p. 626.
- 18) *Ibid.*, p. 663.
- 19) BALZAC, Honoré de, *Le Chef- d'œuvre inconnu*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.X, 1979, p. 425.
- 20) *Ibid.*, p. 427.
- 21) BALZAC, Honoré de, *Louis Lambert*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.XI, 1980, p. 626.
- 22) *Ibid.*, p. 688.
- 23) *Ibid.*, p. 688.
- 24) BALZAC, Honoré de, *La Cousine Bette*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.VII, 1977, p. 54.
- 25) BALZAC, Honoré de, *La Peau de chagrin*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.X, 1979, pp. 86-87.
- 26) BALZAC, Honoré de, *Physiologie du mariage*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.XI, 1980, p. 903.
- 27) BALZAC, Honoré de, *Le Chef- d'œuvre inconnu*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.X, 1979, p. 418.
- 28) BALZAC, Honoré de, *Facino Cane*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.VI, 1977, p. 1022.
- 29) SURVILLE, Laure, *Balzac sa vie et ses œuvres*, Librairie Nouvelle, 1858, p. 97.
- 30) BALZAC, Honoré de, *Le Lys dans la vallée*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.IX, 1978, p. 969 .
- 31) BALZAC, Honoré de, *Correspondance III*, Garnier Frères, « Classiques Garnier », 1964, p. 596.
- 32) BALZAC, Honoré de, *Avant-propos*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.I, 1976, p. 7.
- 33) BALZAC, Honoré de, *Physiologie du mariage*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.XI, 1980, p. 1079.
- 34) BALZAC, Honoré de, *Le Curé de village*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.IX, 1978, pp. 651-

652.

- 35) BALZAC, Honoré de, *Le Chef-d'œuvre inconnu*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», t.X, 1979, p. 416.
- 36) BALZAC, Honoré de, *Lettres à Madame Hanska (1832-1844)*, Robert Laffont, 1990, p. 204.
- 37) SURVILLE, Laure, *Balzac sa vie et ses œuvres*, Librairie Nouvelle, 1858, pp. 95-96.
- 38) LOTTE, Fernand, «Le Retour des personnages dans *La Comédie Humaine*» dans *L'Année Balzacienne 1961*, Garnier Frères, 1961, p. 234.